



1945年大阪府生まれ。サントリー文化財団顧問。68年サントリー株式会社入社、財団法人サントリー文化財団に事務局長として出向後、サントリー不易流行研究所（現・サントリー次世代研究所）部長、経営企画部長等を経て現職。関西学院大学など関西の大学でも教鞭を執る。

関西温故知新。 顔の見える歴史に学ぶ

関西風土に根づく社会貢献

疎開先の態勢で生まれました。終戦直後から高度成長期にかけて、大阪市内で人々が互いに助け合い将来への夢があふれる時代の空気に包まれて育ちました。大好きな大阪で経営者の顔の見える会社に勤めたいという思いがありましたので今の職場への就職は念願どおりでした。当時佐治敬三社長はまた40代、トップに近い経営企画の仕事は、ずいぶん私の視野を広げられました。

サントリー株式会社創業 80 周年を記念して 1979 年に設立されたサントリー文化財団。社会と文化に関する国際的、学術的研究に対する助成と有能な人材の発掘・育成を行い、日本と世界の学術・文化の発展に貢献することを目的に様々な事業を行っています。生粋の大阪人である顧問の伊木さんにお話を伺いました。

継承されるよき精神に学ぶ

79年、「これからは経済だけではあかん、文化の時代や」との佐治社長の着想から、サントリーは「生活文化企業」という企業理念を掲げました。酒類・飲料をはじめとする生活関連ビジネスの多角的な展開とともに、サントリー美術館の設立、サントリー音楽財団やサントリーホール運営を通じた音楽の振興などの文化活動に尽力します。サントリー文化財団は、学術・文化のサポートを目的に設立され、私が社内では、2人目の事務局長として本社から出向しました。30代半ばのことです。

企業が文化活動にかかわることも、財団をつくることもまだ少ない時代でしたが、そもそも社会貢献は関西のオーナー企業では珍しくありませんでした。調べるうちに江戸時代からの伝統があるということを知りました。近江商人の三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）はよく知られていますが、「利益を還元する」という発想ではなくて、商売自体が売り手、買い手、世間によって成立すると考えての行動です。「おかげさま」という言葉にも示されるように、世間を絶えず意識してビジネスをしてきたのが関西企業の特徴で、関西という風土には江戸時代からの社会貢献の蓄積があると思います。

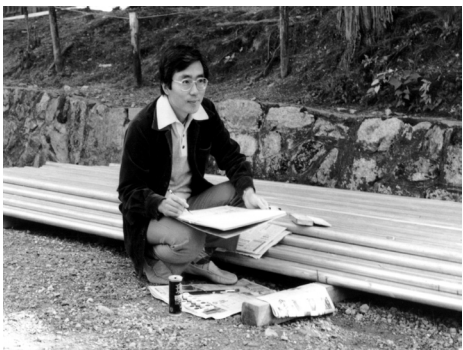
企業メセナ、フィランソロピー、企業市民、最近のCSRなどは東京の企業やマスコミが発信し一種の流行現象のように全国的に広がりました。その元にはキリスト教的な富者の義務や企業の社会的責任という欧米流の考え方がありますが、関西には社会貢献活動も企業活動の血となり肉となる重要な一部分と捉える伝統があると思います。

都市として生活文化の花を咲かせることが大切です。地域という生活の舞台をうまく活性化させる秘訣は、行政、経済（企業）、市民（NPOも含めて）の三者の力がうまく連携し、機能することなのですが、三つの力のうちNPOなどは市民の組織力はまだまだ未成熟だと思っています。志はすばらしいけれどマネジメントの力が足りません。企業が有する人、モノ、金、ノウハウなどの経営資源をNPOなどの市民組織に移転し、有効に活用することも大切です。CSRが叫ばれ、企業も経営資源を社会資源として積極的に活用する流れになりつつありますから、社会が変わる兆しはあります。この面での関西の先駆的な2つの例をあげると、一つはユニークな公共キャンペーンを展開する「公共広告機構」、もう一つは中小企業や個人の志を活かす目的で生まれた「大阪コミュニティ財団」です。こうした活動団体が全国に先駆けて生まれるのも大阪の民間の力のあらわれです。應徳院もきわめて先駆的で大阪らしいお寺だと思います。まちのなかの個性的な文化拠点の役割を果たすお寺ですから、ネットワークの仕方が企業や行政とは違います。また、高齢者と若者の交流のなから世代を超えた何か新しいものを生みだしていけるようなコミュニティ活動の場としての役割を今後果たしてほいてほしいですね。若い人たちは他者と接することも少なく、内向きの傾向が強いようですから。

89年に不易流行研究所が設立され、私は部長として着任しました。日本は経済的成功を遂げたものの生活の中身が未だ豊かでない現状をとらえ、生活の質を高め豊かにする新しい生活像・生活文化を研究せよとのトップダウンでできた組織です。生活文化といっても最初は漠然としすぎて、正直何をやっていいかわからず困りました（笑）。ヒントになったのが、梅棹忠夫さんの「文化は心の足し」や、司馬遼太郎さんの「生活を楽しむものが文化」という言葉です。そこで人間生活の中の5つの分野の楽しみをテーマとしました。それは「つきあい・社交」「芸術・芸能」「遊び・レジャー」「花鳥風月（自然）」「衣食住」です。

不易流行とは松尾芭蕉の言葉で、研究所を設立して半年ぐらいは研究成果がないので、取材にきた新聞記者などにも「不易流行とは？」の説明だけでお茶を濁し（笑）、徐々に研究のスタイルと中身を作っていました。川の流れのように、次々と立っては消える水面の波が時代の先端、流行とするなら、水面下、川底の流れが時を超える大きな流れ、不易です。いわば、表面に現れた波の様子から、底の流れの動きを見極めるといって調査・研究を心がけたわけです。

生活文化を中心に愛着のある大阪をフィールドとして長年眺めてきました。これから大阪は、東京を目指すのではなくて、行政と、企業と市民がよい関係をつくり、魅力ある都市として生活文化の花を咲かせることが大切です。地域という生活の舞台をうまく活性化させる秘訣は、行政、経済（企業）、市民（NPOも含めて）の三者の力がうまく連携し、機能することなのですが、三つの力のうちNPOなどは市民の組織力はまだまだ未成熟だと思っています。志はすばらしいけれどマネジメントの力が足りません。企業が有する人、モノ、金、ノウハウなどの経営資源をNPOなどの市民組織に移転し、有効に活用することも大切です。CSRが叫ばれ、企業も経営資源を社会資源として積極的に活用する流れになりつつありますから、社会が変わる兆しはあります。この面での関西の先駆的な2つの例をあげると、一つはユニークな公共キャンペーンを展開する「公共広告機構」、もう一つは中小企業や個人の志を活かす目的で生まれた「大阪コミュニティ財団」です。こうした活動団体が全国に先駆けて生まれるのも大阪の民間の力のあらわれです。應徳院もきわめて先駆的で大阪らしいお寺だと思います。まちのなかの個性的な文化拠点の役割を果たすお寺ですから、ネットワークの仕方が企業や行政とは違います。また、高齢者と若者の交流のなから世代を超えた何か新しいものを生みだしていけるようなコミュニティ活動の場としての役割を今後果たしてほいてほしいですね。若い人たちは他者と接することも少なく、内向きの傾向が強いようですから。



▲ 30代 風景のスケッチ

映画振興と大学教育 富田 美香 (立命館大学文学部助教授)

いささか時代錯誤的な言い草かもしれないが、私は「コンテンツ」という言葉が苦手だ。

「コンテンツ」という言葉を使うときはある。それは、ネット上で提供される全ての情報や作品、番組、商品—テキスト、音声、画像、動画映像などのファイル形式で提供される、文章、小説、音楽、コミック、絵画、写真、映像作品等々や、売買される物品などを等価に扱う総称としてであり、だからこそ「コンテンツ」という言葉を発するときには、若干の“痛み”を感じずにはいられない。「コンテンツ」には、映画や音楽など、それぞれの芸術の存立基盤である表現媒体や受容環境といった特殊性—フィルムや映画館、コンサートホールや生の音、肉声、身体のパフォーマンス、観客の存在—を一切削ぎ落として、内容情報へと一元化してしまう暴力性を感じるからである。つまり「コンテンツ振興」と「映画振興」とでは力点が異なる部分が多く、大学という専門教育機関においては、芸術の基盤に対する理解を有した専門的人材の育成を通して、振興に寄与することこそが責務だと思っている。

具体的に「映画」教育の場合は、成立基盤としてフィルムと、コマから動画のイリュージョンを再現する機構、投影（映写）に加え、映画館での鑑賞体験も、最低限の基礎として学ぶべき事柄である。110年経った映画の歴史の蓄積を次の世代に引継ぎ、あらたな映画・映像の文化を築くには、たとえば音大生が生の楽器の音調を聴き分ける音感と耳を持つことが基礎であるように、映画の原型としてのフィルムの諧調を見る目と鑑賞体験を持つことが基礎力として必要なのだ。名画座の衰退後、階調が潰れたビデオやDVDでしか古典映画を見られない世代が増えている中で、専門機関がフィルムでの制作から映写まで整えた環境を守らなければ、おそらく次世代の映像作品鑑賞力の涵養は今以上には望めないだろう。これは映画館へ映画を見に行く主体的な観客の育成にもかわる問題であると同時に、創作力にも直結する悪循環の構図である。

つまり、新たな映像文化を築くには、デジタルでの教育は当然必須であり、その土台には110年もの間技術的・文化的に蓄積された財産を活かすことも必須である、という単純な話にすぎない。しかしながら、この常識的な発想が、一般社会や総合大学においてはなかなか共有できないという現状があり、日本における映画教育は先ずこの壁を打ち破る事が課題なのかもしれない。



【略歴】(とみた・みか) 1989年、日本大学芸術学部映画学科(理論・評論コース)卒業。1992年、早稲田大学大学院文学研究科芸術学(演劇専攻)修士課程修了。東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員を経て、2000年より立命館大学文学部助教授、現職。失われてしまった戦前・戦中の日本映画の作品様相や映画史の読み直しを研究するとともに、京都映画文化のアーカイヴ活動として、立命館大学アート・リサーチセンターにマキノ・プロジェクトを立ち上げ、マキノ映画、大映京都撮影所の資料収集や聞き取り調査を展開。



寺院が映画に取り組む意義は何か？映画と演劇の違いは何か？映画を支える製作・配給・上映といった社会システムを再構築していくための次の一手は？應典院と映画にまつわる関係を、「ダライ・ラマの般若心経(劇場版)」と石井聰互初期作品上映会から探るのが、今回の特集である。

特集にあたって、まず第44回寺子屋トークとして「石井聰互監督初期作品上映会」会期中に開催された「映画と大学教育」に出講いただいた富田美香さんの寄稿をお読みいただき、続いて劇場寺院で展開される「コミュニティシネマシリーズ」の第4弾、第5弾の内容を振り返っていただきたい。第4弾「ダライ・ラマの般若心経(劇場版)」では、釈徹宗さんの現場報告を中心に、第5弾「石井聰互監督初期作品」では、関西圏で映画紹介誌「シネルフレ」を発行する「シネコミ倶楽部」の皆さんによる紙面企画・編集をとおして、実行委員の語りを中心に、内容を振り返ることとしよう。

また、実施事業の振り返りに重ねて「コミュニティシネマ大阪」へのインタビューにも目を通していただきたい。大阪発の映画文化創造の可能性を見いだしていただければ幸甚である。

「コミュニティシネマ」の意味・意義

——應典院による映画文化の創造という挑戦

- p.5……寄稿「映画振興と大学教育」(富田美香さん)
 p.6-9……「ダライ・ラマの般若心経」を振り返る
 報告「DVD買っちゃいました!」(釈徹宗さん)
 p.10-15……「シネマロックディズランドナイト」を振り返る
 企画・編集「シネコミ倶楽部」
 p.18-23……インタビュー「映画と市民社会の出会い」

2006・6・3 (土)

應典院コミュニティシネマシリーズ Vol. 4

「ダライ・ラマの般若心経」(劇場版)

○開催要項○

主催 應典院寺町倶楽部
 共催 (特活) アーユス関西・(財)新日本宗教団体連合会大阪事務所
 後援 大阪府仏教青年会・大阪市仏教青年会・大阪青少年教化協議会
 特別協力 フライングジブ・第七藝術劇場
 協力 (特活) こえとことばこところの部屋・(特活) ビハラー 21・
 (特活) 関西国際交流団体協議会・(特活) 関西 NGO 協議会

映画や演劇には作家の作品世界に参加していく聴衆や観客の存在が欠かせない。純芸術とされる絵画や彫刻の世界は、できあがったものを鑑賞することによってその作品世界を享受するのに対して、演劇や映画はできあがった作品を聴衆や観客が観る、あるいは見続ける、もしくは観ない、という選択肢によって、作品が育つか育たないかをも左右する。宗教者ダライ・ラマが般若心経を語った映画を應典院という寺院で上映した意味、意義は何か。ルポルタージュから紐解こう。

【開催の主旨と映画の概要】

この映画は、仏教最高の経典のひとつ「般若心経」(ハート・ストラ)の心を、世界で最も著名な仏教者・ダライラマ14世がカメラに向かって分かりやすく解き、インド国内の仏教的生活を送るチベットの人々を訪ね歩く秀逸なドキュメンタリーです。ジャーナリスト大谷幸三とカメラマン菊池和男が、インド・ダラムサラにて5年間にわたる取材を経て完成させた貴重な映像作品でもあります。

観音菩薩を主人公とする経典「般若心経」は、大乘仏教の中心思想である「空」を説いた600巻にもなる「大般若経」のエッセンスといわれますが、その人気はとりわけ日本で高く、写経や遍路、最近では柳澤桂子や新井満の意識による出版がベストセラーになるなど、日本人の心の拠り所として親しまれてきました。観音菩薩の化身とされるダライラマ14世自身が、その肉声ではじめて「般若心経」の精髓を語るこの映画は、単なる経典の解説を超えて、これからの世界を構想する原理としての仏教の可能性を指し示すものといえます。

また、今回の上映会のゲストには、今年3月まで米国スタンフォード大仏教研究所の客員研究員を務めた、宗教学人類学者・上田紀行さん(東京工業大学助教授)を招きます。上田さんは、「現代社会に取り組む仏教」研究を行い、米国や日本など各国の現代仏教の実践について講義を担当、昨年10月には、同大がダライラマ14世を招き、7千人の学生と対話を行うというホットな現場も体験されています。日本の仏教とはまったく異なる位相を持つ、最新の「グローバル仏教」の可能性について語っていただきます。

【以上】2006年4月17日の本事業の企画書より

□應典院□イベントルポルタージュ ●2●「ダライ・ラマの般若心経」プレミア上映会

DVD、買っちゃいました

積 徹宗(浄土真宗本願寺派如来寺・住職【大阪府池田市】)

▶一押しのだらい・ラマ本▶

『ミリンダ王の問い(那先比丘経)』というお経があります。バクトリア王であるメナンドロス(ミリンダ)と仏教僧のナーガセーナ(那先比丘)とが対話・問答を繰り返す様子を記したものです。ギリシア思想とインド思想との邂逅ということで、大変興味深いお経です。私、個人的に好きな経典です。メナンドロスとナーガセーナは、「靈魂は存在するか」「記憶によって何が生じるのか」「念仏による救い」など、次々と対話を展開します。最初は、「そんな譬え話をして、一体何が言いたいのか」などと議論していギリシャ人・メナンドロスも最後にはナーガセーナの深い知解と高い人格性に感動し、仏教に皈依します。

ところで、ダライ・ラマ氏の著書や関連書籍は膨大にありますが、中でも『ダライ・ラマ、イエスを語る』は一押しです。私は、これはまるで現代版『ミリンダ

王の問い』のようであると思っております。『イエスを語る』は、仏教徒であるダライ・ラマ氏がキリスト教徒のセミナーで講師をするという、実に味わい深い本です。ダライ・ラマ氏が敬虔なクリスチャンたちからの質問に対して誠実に答え、ユーモアも交えながら意見を交換します。仏教者もキリスト者も、ともに聖書を読み、瞑想し、それぞれ自らの信仰と他者の信仰を大切にしながら語り合います。その場に居合わせた人々は、お互いに敬意をもって対話することがどれほど高い宗教性を発揮するか、実感したに違いありません。

1. 第一部「ダライラマの般若心経」

さて、6月3日(土)、應典院で『コミュニティシネマシリーズVOT』が開催されました。第一部は、劇場版「ダライ・ラマの般若心経」のプレミア上映。第二部は「上田紀行、グローバル仏教の未来を語る」という構成です。

シネマ「ダライ・ラマの般若心経」は、インタビュー形式でダライ・ラマ氏が仏教の基礎知識を説くというものでした。日本でも人気の高い『般若心経』を起点に、ダライ・ラマ氏本人が「縁起」や「空」や「無」といった解説をする貴重な映像作品です。

冒頭、ダライ・ラマ氏が「般若心経」最後の真言部分、「ギャーテーギャーテー（行け行け）…」を五段階のステップとして解説しているところが面白かったです。真言部分を解釈することに関しては賛否両論あるのですが、宗教体験を段階別に考察するのは仏教の特徴でもあります。

また、作品中、「空とは何か？」という質問に対して、ダライ・ラマ氏は「ここに象はいません。つまり象の非存在があるということなんです。それをあなたは認識することができます。あなたが象を知らないからです」などと、語っていました。このような思考回路はインド文化系独特のもので、もともとインドには、「ここに象はいない」を「ここに象の非存在がある」という表現へと変換できる言語体系があります。だからこそ、空や無をベースにした哲学が発達し、無理数を平気で扱う数学を早くから活用していたのだ、と指摘されるどころです。

2. 第二部「上田紀行、グローバル仏教の未来を語る」

第二部は、上田紀行氏による講演でした。應典院では3回目の登場。上田氏は、昨年一年間、スタンフォード大学で日本仏教の社会活動について講義を担当。そこでどのような講義が行われたかというお話を中心に、アメリカの仏教事情や現代における仏教の役割、それにダライ・ラマ情報など、幅広いトピックが展開されました。

「アメリカでは仏教に対して寛容・非暴力の期待がある」「欧米では、仏教はメデイーションというイメージが強い」「日本仏教の発言力はほとんどない」「ダライ・ラマ氏への毀誉褒貶」など、直接アメリカの仏教を肌で感じ取った人ならではのお話が続きます。

また、「華やかで屈託なさそうに見えるカリフォルニアだけど、実は鬱屈している」という指摘は、示唆に富んでいました。ヨーロッパで追いやられた人々がアメリカ東海岸に移動し、さらにその東海岸からも追いやられた人々が西海岸へと移動していった、しかも先住者を追いやりながら…。うわあ、なんて陰惨な成立事情なんですか。こりゃ、鬱屈しても不思議じゃないですね。なぜ西海岸に仏教が盛んなのか、その深層を垣間見た気がしました。

それにしても、「存在の本質は空という相互依存性である。仏陀さえ空だ」と語るあたりはしびれます。おお、やっぱり仏教って、素敵。機会があればぜひ見ていただきたい作品です。私、DVD、買っちゃいました。



△上映前に行われた「会員のつどい」

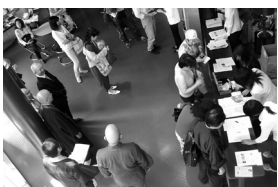


△大画面を使った講演



△笑いが絶えない終了後の交流会

開催当日の風景



△混み合うロビー



△上映と講演の間は「チャイ」で休憩



△熱心にメモをとる参加者

△とても小さな規模だけど▽

今世紀、最も展開するのはおそらくイスラームだと言われています。キリスト教は頭打ちというところでしょうか。これから大幅に教線を拡大していくことは考えにくいですが、仏教にいたっては、すでにヒンドゥー教徒のほうが多い…。キリスト教・イスラームとともに世界三大宗教と並び称されながらも、仏教は縮小の一途をたどっています。

しかし、とても小さな規模だけど、人類に仏教が提示できるものはすごく大きいと思われれます。特に、現在、日本やアメリカのようなハイモダン状況に対して必要な知見がいっぱいあります。そして、そのことを上田氏の講演で再確認することができました。うん、やっぱり仏教、素敵だ。(しゃく・てっしゅう)

【関連情報】今秋、本稿を執筆いただいた釈徹宗さんを2回、應典院寺町倶楽部の事業にお招きいたします。ふるってご参加ください。

10月29日14時「死者とのコミュニケーションは可能か？」

ゲスト：内田樹さん（神戸女学院大学）・釈徹宗さん

10月31日18時「大阪発信：お寺の「実力」〜社会参加仏教と現代」

ゲスト：ランジャナ・ムコバディヤさん（名古屋市立大学）

服部隆志さん・清史彦さん・釈徹宗さん

○開催要項○

主催 應典院寺町倶楽部
 特別協賛 松下電器産業株式会社・株式会社トランスフォーマー
 後援 財団法人大阪都市協会 (コミュニティシネマセンター大阪)
 協力 ぴあフィルムフェスティバル事務局・大阪ショートショート実行委員会事務局・神戸芸術工科大学・シネコミ倶楽部・NPO 大阪アーツポリス協議会・ビジュアルアーツ専門学校・シネファンク・神戸アートビレッジセンター・cocoroom・直木三十五記念館・RCS・如月社・彩都IMI 大学院スクール・in → dependent theatre・恋愛研究会・からほり倶楽部・プラネット +1
 企画運営 石井聰互初期作品上映会実行委員会

【上映作】 狂い咲きサンダーロード / 高校大パニック
 【トーク】 石井聰互監督オープニングトーク・オープニングパーティー

A

シネマロックデイズ&ナイツ幕開け

大切だと思っている人がいて、その人が大切だと思っている人がいて、なにやら再び巡りあうのらしい。20年ぶりのらしい。0歳の子どもが成人式を迎えるくらいの時間。産婦人科で一緒にオギャーと泣いて、顔も覚えていずに出会うのではない。修羅場の映画の現場で出会ったふたりは、当時20歳前後。社会に踏み出すためにはロックみたいな力の出し方・踏み込み方だったろうと想像する。20年が経ち、一目みただけでも痣のあるふたりなら感じ取るだろう。ふたりがその後どんな人生を過ごし、ロックな魂でなにを考え、なにを価値とし生きているのかを。けれど、映画という手法を選んだふたりは、ふたりで問うだけではなく、上映会という機会と場によって、関わる人々に問う。

20年前あなたは何をしていたか。そして20年後あなたは何をしているか。

上映会前日15年来の友人に電話をした。「一緒に現場に入るの、久しぶりやね」学生の頃、京大西部講堂で裏方仲間だった彼は中退し、映写技師の会社を起こした。わたしは京都を離れた。今回は技師として連日應典院につめていた。わたしたちはとくに何かを話すというわけでもなく、現場の休み時間を過ごした。それでも学生時代のときには話題にできなかったようなことを話していて、それぞれの人生を歩んでいることを確かに感じた。走りはじめた人は走り続けていけば、また巡りあうのだな。

(上田假奈代・cocoroom)



3日間のイベント最初のプログラムでは、『狂い咲きサンダーロード』と『高校大パニック』の上映の間に石井監督トークを挟み、そのまま約1時間監督参加のオープニング・パーティーが行われた。



23日(金)【第一日目】「i s h i i SOGO〈爆裂〉ナイト!」

——その名の通り、監督もろとも應典院が爆裂して破裂した一日目の夜

2006.6.23 (金) ~ 25 (日)

應典院コミュニティシネマシリーズ Vol.5

石井聰互監督初期作品上映会

<編集企画・構成：シネコミ倶楽部>

1980年前後のバブル前夜、日大学芸術学部1年、19歳の石井監督は、8ミリ映画「高校大パニック」で衝撃デビューを飾った。続く16ミリ「狂い咲きサンダーロード」は、全国東映系で劇場公開され、日本の自主映画史上輝かしい軌跡となった。そして、石井監督率いる狂映舎やダイナマイトプロの製作現場からは、今や名だたる監督 緒方明、阪本順治、松岡錠司らを輩出している(また、現在、應典院住職秋田光彦も当時プロデューサー兼脚本家として参加している)。

今日のデジタル技術の飛躍的な進歩は、無名の若者でさえ、高質の映像作品を撮ることを可能とし、かつ、ネット配信をはじめとして発表の場も数多く存在している。あふれんばかりの大量生産された映像(表現行為)から、私達はあの石井監督が与えた衝撃を受けたことはあるか。あの衝撃は過去のモノか。彼らは何故、表現するのか。何故、映画を作るのか。「これが、日本のインディーズシネマの原点だ!」と言切った今上映会は、上映会の鑑賞以上のモノを提供したのではないだろうか。

映画制作を目指す若者達よ、あの時代をリアルタイムに体感した若者達よ、映画を愛する人達よ。この上映会から何を得たか!あの「シネマ・ロックデイズ&ナイツ」を振り返る。
 (香月風河)

シネマ・ロックデイズ&ナイツ

24日(土)【第二日目】「完全制覇！石井聰互、監督生活30年の全貌」

—— Bプロ・Cプロ・Dプロ、それぞれ「鼻血が出そうなほど」濃い内容にもかかわらず、約10時間ぶっ通しで見ると石井監督により近づけるという仕組みの一日。

【上映作】88万分の1の孤独

【トーク】シンポジウム「映画と大学教育～キャンパスから創造が生まれるか」(第44回寺子屋トーク)

監督が映画製作の術をレクチャー。その後に見る『88万分の1の孤独』は格別。続いて神戸芸術工科大学で教鞭も取る石井監督が、大阪芸術大学の太田米男教授と、立命館大学の富田美香助教授とともに熱く語った。

「寺子屋トーク併催」で濃密な学び

京都・大阪・神戸の大学から先生を呼んで、「映画と大学教育」を討論してみようと言われ、「面白い」と思って引き受けたのは、紛れも無く私。この辺が身の程知らず。

事前準備と称して、各大学の先生方を訪ね、数時間に及ぶヒヤリングを敢行したが、これがまた実に面白い(各先生方、貴重な時間を本当にありがとうございました)。そのまま講演していただいた方が面白かったのでは、と思うほど中身の濃い話に、我を忘れ、聴入ってしまった。本当に充実した時間を過ごすことが出来、至福の極みだった。

ヒヤリングしたメモを元に、あらかじめの進行台本を作り、当日の朝、先生方と簡単な打ち合わせだけをして、本番に臨んだのだが、時間が足りなくらい充実したシンポジウムにすることが出来た。今更ながら良いテーマだったんだと再認識した。特に大学で映画を教えて、その出口をどうするのか、実は先生方も真剣に悩み、考えていることが素晴らしい。

これから先の映画を、いや社会全体を支えていける人材を共に育てていきたい、と改めて思った。

(村田 光男・株式会社メディアアート)

<シンポジウムに登壇した富田美香さんの寄稿をp5に掲載>



B

【上映作】突撃！博多愚連隊／高校大パニック

【トーク】石井聰互監督インタビュー「石井聰互と狂映舎～80年代自主映画、栄光と挫折の時代」

『高校大パニック』と『突撃！博多愚連隊』の上映の間に石井監督に直撃インタビュー。今まで明かせなかった狂映舎時代の「栄光と挫折」を語りつくした！

Cプログラムを担当して

石井聰互監督は明らかに一時期の私にとっては憧れの存在であった。それは自分が思い描いた映画監督という職業を手に行っている成功者としての存在でもあった。実際にはそれ程に容易な道でないことは後に分かる事であるのだが、そんなことは高校生で日々の生活で閉塞感しか感じていない当時の私は知る由もなかった。

偶然にも秋田さんと出会うことから石井監督の初期作品上映会の実行委員に名を連ね、あまつさえプログラムの中でインタビューを担当することになることなど思いもよらない幸運であり興奮を抑えられないものであった。聞きたいことは山ほどあるが限られた時間でなおかつプログラムとしての役割もある。

ポイントとしては2点に絞ったつもりだった。一点は音楽との関わりについて、そしてもう一点は時代を感じる際の監督の視点ということである。音楽のことはある意味では予想の範囲でいわば再確認の作業のようにも思えた。

しかしながら現実起こる事件がフィクションの想像を超えているようなことについて聞いたときにオウム真理教事件には衝撃を受けたと監督が発言されたことは興味深かった。

この上映会を通じて監督の過去を単に振り返るのではない次への助走のようなものを感じ獲ったのは私だけではないのではないか。

(小辻 昌平・直木三十五記念館)



C

【上映作】シャッフル／狂い咲きサンダーロード

【トーク】石井聰互監督インタビュー「映画作家石井聰互、創造の秘密～カオスを越えて、「表現」を磨く」

『シャッフル』と『狂い咲きサンダーロード』の名作上映の間には、またまた濃い内容のインタビューが行われた。お題は「映画作家石井聰互、創造の秘密～カオスを越えて、「表現」を磨く」

イイ大人たちのシネマロックデイズ&ナイツ

ロックとかプロレスとかアイドルとか、男として避けて通れないものにぶち当たり続けたまま大人の階段を上ってしまったイイ大人たちの集まり、「恋愛研究会」。もちろん、「狂い咲きサンダーロード」も、「爆裂都市」もそういう存在であった。それが石井監督とともにステージに立てるなんて！これまで悪ふざけしかしたことのない我々にとっては、エルボー連合相手に3人で立ち向かうような気分であったが、「恋愛研究会」は「恋愛研究会。」らしい仕事をするだけ、と臨んだ3日間だった。

石井監督は最後に笑顔でおっしゃいました。このイベントで一番心に響いたのはメンバーの(監督の没作品の資料を前にしてのトークで)「ここに並ぶものが増えな

いように、頑張ってください」であったと。いささか不謹慎であり恐縮だが、監督のそのお言葉を聞いて、やってよかったと思ったのであった。プレーキのないバイクで風になった仁さん(魔墓呂死特攻隊長)、我々はあなたのように筋を通せたんですね。

あとはうちのアタマ、イトウタカアキが、仁さんに扮して應典院を突っ走った。かぎ爪をおたまに付け替えて、「盛ってやろうじゃねえの！」とお客様にカレーをよそる姿に、多くの人たちの血がたぎったことであろう。

監督もお客様も、應典院はイイ大人ばかりであった。

(劔 樹人・恋愛研究会)



D

三日間を締めくくりに用いた素材は「最新作」と30年間を見つめる対談：

▼展示資料を持ち込んで
得たもの 於勢博之

E

【上映作】鏡心【完全版】/シャッフル

【トーク】石井聰互監督 vs 秋田光彦対談「インディペンデンスを生きる～映画、そして至高の物語」



最新作『鏡心』と25年前の作品『シャッフル』の間に挟まれ実現した、石井聰互VS秋田光彦ガチンコ対談。2人が語った「インディペンデンスを生きる」映画、そして至高の物語」とは？

電話が怖い

秋田さんから自宅への電話はほぼ良くない内容のことが多いことになっている。案の定、最終日の石井監督との対談コーナーの進行役をやるという指示であった。固辞するも押し切られる。何故僕なのかと悩んだ結果、緊張感のある対談にしようと思った。

秋田さんと彼が大阪に戻ってからの付き合いでかれこれ20年になる。しかし、ダイナマイトプロ時代の話は出会ったころ、ずっと昔に少しだけ聞いたぎりである。石井監督も「再会するまでには時間が必要でした、色々ありましたから」と二人きりになったときに聞いた。どちらも言葉数が少なかった。だからこそ、あの時代を楽しい昔話で語るのではなく、次のステップに向けて真正面からの振り返りが必要と考えた。

舞台の二人は左右に離れてお座りいただいた。対談形式の演者配置ではお互いに目配せが届かず、真剣勝負のトークになる距離である。進行役の力不足もあってスムーズな進行とはならなかったが、対談の後半にはあの時代の装飾のない総括が語られたと思う。さらに、今回の上映会が第2章の幕開けの予感がするとの発言も飛び出した。心の中で思わず喝采をあげた。しかし、應典院で何かをやらかすのかとも思うと、秋田さんから自宅への電話が怖い。

(西島 宏・株式会社シーエヌ)

「よかった」「最高!」「面白かった」と、聞かされてきたたくさんの言葉から、この上映会が大成だったことは言うまでもない。だが、その中で寄せられたアンケートを見ていて面白いことに気がついた。10代の意見からは、「衝撃だった」「今回の上映会で製作意欲がメキメキわいてきた」と新しい感性の目覚めの瞬間が感じられ20代では、「自分と同じ年のときに撮った作品に度肝を抜かれた」「1980年に生まれたこともあり色々考えさせられた」と、石井映画と「同年代」である自分とリンクさせたものが多かった。そして、30代は「10代の頃に見たかった!」と古い悔しさを表し、40代は「当時が思い出せてよかった」「やっぱりサンダーロードに尽きる!」と、石井監督作品と共に走りぬけた青春時代を思い返す意欲が多く寄せられた。

年代によって個性が色濃く出たこのアンケートから読み取れるのは、「衝撃(10代)・吸収(20代)・迷走(30代)・確信(40代)」という30年の時の流れ。これは、まさしく石井聰互監督が歩いてきた30年の道のりそのものではないだろうか? 10代〜40代の間にある30年という空間で、監督が散りばめてきた映画のタネが、見事新しい手によって摘み取られていたという紛れもない真実がこの上映会にはあった。そして、監督が次への境地へと「應典院」から踏み出した31年目への力強い一歩を、誰もがこの一大イベントで確認した3日間だった。「感謝」という言葉が多く溢れた今回の上映会。「感謝」はまた次の「出会い」を生み、「出会い」は受け継がれて「希望」と「感動」に生まれ変わる。「ありがとう」そして、また会う日まで。

【シネ】編集室 中西奈津子

【実行委員のコメント】映画の求心力、場や人や思いを引き寄せる麻薬のようなチカラを改めて感じました。光と影の渦巻いた25年前の、石井組の現場に迷い出たような、怪しげな快感でした。ありがとう。ね(秋田光彦) / 「人生に必要なことは映画で学んだ。そう、みんなで映画をみる機会をつくるとはそういうことなんだ。(上田假奈代) / 「石井監督30周年」「俺のファン歴25周年」「ここに石井監督と俺が交差し、監督の人生に俺登場」「至福」(於勢博之) / 石井聰互監督の漲るパッション! 乾いた肉体はスポンジのように吸収し、トランス状態の3日間だった。至福。(香月風河) / 興奮と感動の怒涛の三日間でした。なかなか興奮が醒めないでしばらくは何を言うにも仁さん口調でありました。石井監督、秋田住職、関係のみなさんに感謝です。(小辻昌平) / 映画とは夢、人の記憶こそ真実。だから人は集い、物語る。映画が真実となる瞬間に出会えたことに感謝です。(中川 俊秀) / 実行委員自身が楽しめないとな、との思いで全力疾走。でも、三十年ぶりの自主上映会に体がついてきませんでした。(西島宏) / 映画を映す、観る。そこに+aがあることで、生まれ、拡がり、深まること。それらをはっきり体感した至福のロックデイズ。(橋本鏡子) / 石井聰互監督という人物に、作品だけでなく、直に触れられ、そのひととなり魅了された。感謝、多謝。(村田光男) / 十年一昔。30年前に日本映画界に閃光を与えた石井監督作品の上映は三昔の回顧でなく未来の展望となった。(山口洋典)



△展示した資料の横で石井監督らを前にパフォーマンスをする於勢さん。4月26日にcocoroomで開催の「石井聰互プレ大阪」以降、本上映会の応援団として活躍。

「石井聰互初期作品上映会応援団」

時は流れ、大学も卒業して十数年経つたいま、インターネットなる文明を駆使し、「情報を集め」「ショッピングを行い」「便利になる中、人間同士は希薄になり、声を発せず絵文字で表情を表現する術を身に付けることが、当たり前になりつつある中で、また「映画を通して人と人が触れ合うことが出来たこと」が、非常に懐かしく、また新鮮であったことに感激しております。そしてその人達の熱情を受け、再び「何か鋭いものが突き刺さりました」。

2006年5月22日、應典院を應典院たらしめていた「主幹」という立場が、新たな人材に交代したことをお披露目する「主幹交代式」がやや仰々しく、執り行われました。70名を越える方々にお集まりいただき、10年目の應典院に向けて、これまでを振り返り、これからを展望する場となりました。謝辞をいただいた3名のおこそばを改めて緊張感として携えていくため、ここに再掲しておくこと、サントリー次世代研究所の佐藤友美子さんからは「應典院のこれまでとこれからをと考えていく上で、重要だと思うのは信頼ということばではないかと感じているが、新たな人材にはこれまでやってきたことをだけをやっていくだけで信頼が得られるとは言えないので、新しい味を出して行って欲しいし、これまでやってきたことには誇りを持って、また新しいことにつなげて行っていただきたい」と、京都大学の高田光雄先生からは、「追いつめられたときに出てくるすさまじい力と、誰もがあきらめるようなときにもあきらめない力、そしてそうして何かに取り組んでいくときの高い倫理観、それが大切」と、そしてきょうとNPOセンターの深尾昌峰さんからは、「得度式にも陪席させていただいたが、この場で話をしていても、宗教が持つ力、お寺が持つ力を感じている」と、それぞれの立場に即して貴重なおこそばをいただきました。実家から両親も参ったところですが、冒頭、上田假奈代さんに朗読いただいた「雨ニモ負ケズ」のとおり、常に変わりゆく社会に向けて、これからも「呼吸する、お寺」であり続けるよう、決意を新たにしたいところです。(山口洋典)

写真と記録

二〇〇六・五・二二 浄土宗大蓮寺塔頭應典院

主幹交代報告式



△実家より参加された両親の驚きは「ここがお寺？」門出を祝っていただいた皆さんにお礼のことが。



△一般的な僧侶Aに対し三寶を敬う生き方としての僧侶B。最後は新旧主幹が次の10年に向けての決意表明。

●主幹交代式にあたり、ご欠席の方々からも温かいお言葉を頂戴いたしました。ありがとうございました。ここに一部ではありますが、ご紹介させていただきます。(順不同・敬称略)

- 秋田さんと山口君のコンビで新しい動きが出てくることを期待しています。滋賀にも文化の香りをおすそ分けください。
●(岡部圭宏) 特非善利活動法人市民がききえる市民活動ネットワーク滋賀代表 ● 應典院が静穏を宿しつつ、新たな力を得て、クリエイティブさに磨きをかけ、更なる発展をされることを祈念申し上げます。
●(川中大輔) シチズンシップ共育企画代表 ● 山口洋典さんの新しい門出をお祝い申し上げます。これまでの知と経験と持ち前の熱意が應典院の慈悲と共生社会実現のための取り組みに生かされること存じます。
●(肥塚浩) 立命館大学専門職大学院経営管理研究科副研究科長 ● 主幹就任、おめでとうございます。最強コンビで任職とともに関西の市民文化をますます盛り上げてください。これからの活躍に期待しています。(田村太郎)
● 山口様の新たな天地での活躍、楽しみにしております。地域での精力的な試みの成果が楽しみです。富野暉一郎／龍谷大学法学部教授 ● 秋田さん、よき方に巡り合われてよかったですね。お互い忙しくなつたけど(今までもか...)、前向きに生きましょう。
●(服部隆志) アーユス関西事務局長 ● 應典院を拠点に、新たなコミュニティの形を発信し続けていただけていることを、心より期待しております。(古山喜章) シネコミ倶楽部代表 ● 地域と人々をつなぐ接点としてのお寺、人々の社会への参加の機会を作るお寺のあるべき姿を創造できる山口さんにびびったりのお仕事と存じます。これからの活躍を期待します。(松浦さとし) 龍谷大学経営学部助教 ● 自らの最後の職場と考え、御寺の発展に尽して下さい。健闘を期待します。(森島朋三) 学校法人立命館総務部長 ● 新緑の風と共に應典院にも期待の風が舞い込み、一劇団の主幸としてワクワクしております。関西演劇界の中心の一つとなるような「場」を共に盛り上げて行けたらいいなと思っています。(山内直哉) 隕石少年トマスター
- 先代主幹より
應典院10年を来年に控え、最大の転機が、このたびの主幹交代だと思えます。
主幹というのは、この異貌の寺のプロデューサーであり、また代名詞でもあります。また、これまで都市の創造拠点として出会ってきたいろいろな人材やできごと、関係を結び、重ね、育む「時代の編集者」の役割もあります。新しい主幹の力によって、應典院が次のステージへと一気に駆け上がることを期待しています。
私が傾注しなくてはならないことは、師匠として山口さんに「仏教」を伝えること。学問というより、現場として仏教をどうとらえ、どう生きるかという課題でもあります。僧侶AとBのセッションが楽しみです。それでもあります。それって、師弟ふたりで向き合う最大のクリエイティブなのかも。(秋田光彦)



△対談の後、任職より應典院の全スタッフが紹介。小僧インターンも含めて総勢7名が全員集合。



△祈詞朗読で幕を開けた主幹交代報告式では3名の祈辞。それぞれに期待のこそばが寄せられた。



△交流会は上町台地界隈のネットワーキングの場。結の「Cafe Bar」の長谷川泰さんがプロデュース。



△対談には字びの師、渥美公秀先生(大阪大学)が。仏の道の師、秋田光彦任職との間で新主幹が決まる。

映画と市民社会の出会い ～コミュニティシネマの可能性～

豊かな映画映像環境を育むため、官民が一体となって取り組む非商業的な上映活動である「コミュニティシネマ」。それは映画を興行や娯楽ではなく、市民を育て、地域を創造するメディアとして捉えるものです。大阪では2003年9月に、より豊かな映像環境に向けて積極的に取り組むアピール「大阪宣言」が全国に発せられ、(財)大阪都市協会内に「コミュニティシネマセンター大阪」事務局が発足しています(2006年4月より「コミュニティシネマ大阪実行委員会」として活動)。コミュニティシネマのこれまでとこれからについて、事務局を置く(財)大阪都市協会文化事業担当本部長の山崎茂樹さん、シネ・ヌーヴォをはじめ関西の映画文化を引っ張ってこられた景山理さん、お二人に秋田光彦がお聞きしました。



山崎茂樹さんインタビュー
芸術文化都市・大阪への挑戦

●アートの育成と創造発信

まずは大阪市の文化振興全般について、とくに先端的なアートを行政が扱うことについてお話を聞かせてください。

山崎：芸術の分野はまずとも幅広く多様性に富んでいます。行政の立場からは、それが正しい正しくないというのではなく、公序良俗に反しない限り高い低いの違いだけで、すべての芸術に公共性があると私はとらえています。また、芸術によるまちづくりを目指そうとする場合、限られた予算内では有形、無形を含む大阪の潜在的な芸術的価値を顕在化させることが重要であると思います。そのためにも効果的な芸術の分野は何かと考えると、創造性の高い先端的な芸術活動を活性化させることが今、一番必要ではないかと思っています。

——創造性があってもあまりに先端的だと市民が受け入れにくいところもありますね。

●人材育成としてのCC

山崎：CCセンター大阪もシネ・ヌーヴォ代表の景山理さんのネットワークのなかで生まれてきたものですが、2003年に全国に先駆けて、CC宣言したもののその後動きがあまりありません。現在は次へ向けて準備期間ととらえています。CCセンター大阪は単なる上映運動だけではなく、映画に関する人材育成を視野にいれた事業体として、来年度にはNPOを立ち上げようとしています。その母体が今年4月に発足した実行委員会となります。



山崎茂樹さん [財団法人大阪都市協会 理事兼文化事業担当本部長] 1965年より大阪市役所に勤務。1988年市民局文化振興課に配属、以降文化振興に携わる。生活文化部主幹(文化施設担当)、文化振興課長を経て、2003年4月より現職。文化事業全般の総括及び管理を行っている。また、大阪市の文化振興のための「芸術文化アクションプラン」などの提言や計画にも深く関与している。

——NPOを立ち上げた後の行政との関係はどうなるのですか？

山崎：行政としては支援しなければならぬと思いますが、基本的にNPO主導です。先端的な芸術を扱うと今後の継続性を考慮するならば、NPO単独で取り組んだ方がよいと思います。人事異動が多い行政の場合、現場の実態をつかむのに時間がかかり、現場が混乱する要因にもなりかねないので、自立したNPOを行政が信頼して任ずというのが良いと思います。

——演劇においては芸術創造館、精華小劇場などの拠点整備やそれをインキュベーションとして機能させることで底上げの効果があったと思いますが、映画は映画館作るということではないように思います。その辺はどうですか。

山崎：そうですね。上映場所はたくさんありますから、上映作品の内容の選定と人材育成が重要ですね。

——映画を通して人材を育成するための大切な点はどういうことなのでしょう。

山崎：人材の育成では、私は行政側の予算的な措置も必要ですが、より大切なのはバックアップする姿勢や励ましであって、行政側は専門

山崎：だから5年前から実施した「現代芸術祭」などは、先端的なアートの分野と一般にとつきやすいアートの分野の両面を組み合わせたアートしました。このときの元になる「芸術文化アクションプラン」の提言には3つの視点、1. 芸術家、2. 市民、3. 創造性、がありました。大阪で地道に活動する芸術家を世に送り出し(1)、アートを理解し評価できる市民の育成とそうした能力を既に持っている人たちの需要にこたえること(2)、アートの創造発信(3)です。

——とくに(3)について、いろいろ先駆的な取り組みを果たしてこられましたね。

山崎：よそから有名な芸術家を招聘して終わりではなく、まず大阪で活動するアーティストやプロデューサー、アートマネジャーとのネットワーク作りに着手しました。築港の赤レンガ倉庫をはじめとする、既存の建物を利用した拠点づくりは幅広いネットワークを構築するため必要でした。行政側としていろいろなジャンルのアートを推進するためにも、マネジメント能力を高めながら事業を組み立てたいという思いがありました。そのなかで生まれた1つにコミュニティシネマ(以下CC)があった訳です。

——家を信頼し、あまり口出しをしないほうが良いと思います。そのためには普段から、交流し理解しあえる環境作りが必要だと思っています。

——その中には新たな映画製作も視野に入っていますか。

山崎：視野に入れています。今、行政側は製作に力を入れており、CCは上映に力を入れている状態です。行政側の支援が上映と製作の窓口が別という問題があつて、もつと一体的な協力体制を整えなくてはなりません。その連携のためにもCCセンター大阪が調整役となることを期待しています。映画に対するニーズも多様化していますが、メジャーなものだけに傾くのではない形で、アートが市民の生活の中に組み込まれるようになってほしい。市民が関わり参加していかないと身近なものになりません。

——映像の受け手・消費者だけでなく、市民がカメラを持って送り手側に立てればいいですね。現在のデジタル技術の発達は相当に革新的で、映画館の概念も変わってきましたね。

山崎：そうですね。鑑賞だけではため、市民の交流、参加があつて感性が発揮されると思います。

創造都市戦略がいうように、市民の意識を変えるのに有効なのがアートの特性だと思います。

——80年代に私が若い頃に関わった雑誌「ぴあ」の自主映画運動とは明らかに違います。当時は都市政策、まちづくりという観点は持ちませんでしたから。大阪芸術大学、ビジュアルアート専門学校が一流の監督を輩出しており、大阪は映像都市つまり、創造都市という絵を描きやすい素地があってポテンシャルが高い。そしてシネヌーヴォ、第七藝術劇場、プラネット+1など、周辺には多様な上映現場があるのでそれらを含めた全体像の中でCCを論じていくことは大事です。

山崎：そのようなものを潜在的芸術価値、固有の芸術価値といっているのですが、大阪のポテンシャルを活性化させるために、アート分野を超えて、福祉や教育、環境など幅広い分野でアートをうまく機能させていければと思います。

——應典院についてメッセージをいただけますか。
山崎：このたび大阪市と財団法人大阪都市協会（以下、都市協会）の公募した芸術系NPO支援・育成事業受託※で、應典院寺町倶楽



▼景山 理さんインタビュー
多様な主体が協創する映画文化

——来年、CCを推進するNPOが立ち上がるべく伺いました。

景山：はい。これまでCCセンター大阪の事務局を置いてきた都市協会が解散することに伴い、設立します。実は3年前にCCセンターを検討する際、既にNPOによる運営も視野に入っていました。しかし、組織をつくる時には、自分たちがやりたいことができる枠組みを選択するのが最適です。例えば国立近代美術館東京フィルムセンターに声をかけて国家財産を借りるとき、都市協会のような公的な団体では借りやすいわけです。だからこそ、都市協会に事務局を置いて、活動してきました。当初から、映画を制作する人間に対してスタジオや編集室など、そしてそれを観る場、そうした映像文化センターが欲しいというのが強くありました。が、充分にできたとは思っていません。

部が選定されました。築港のpiaNPOでの活動はある実験です。現場に実際に出て、地域とアートの新しい関係を構築してもらいたいと思っています。映画とか演劇という特定ジャンルで評価されるのではなく、教育や福祉の現場、まちづくりなどにアートがどのような力を発揮するのか、それを実証してほしいと思っています。ぜひ成功させてください。

——映画に限らず、アートは地域や社会のためあるべきです。外に目を向け始めたアーティストをどう社会のなかに結びつけるのか、がんばります。今日はありがとうございました。

（大塚 郁子）

※【芸術系NPO支援・育成事業】

大阪市が「芸術家や芸術系NPOを支援・育成することのできる優れた団体をその手法も含めて募集」した事業。応募5団体の中から、2006年度、特定非営利活動法人大阪アーツポリアとともに應典院寺町倶楽部が選出された。今後、應典院寺町倶楽部では築港のpiaNPOにも活動拠点を設け、各種相談、情報提供、人材育成、研究会ならびに発表会や交流会等に取り組む。医療、福祉、教育、環境等、広範な分野からアートに接近する。

個人的にはNPOを作るのがベストではないと思います。文化活動では、むしろ民間と行政と一緒に動いていくことによって、眠った資源を活用することができるからです。大阪における映画に関する民間の活力として、シネヌーヴォーによる上映活動をよく取り上げていただきますが、重要なのはプラネット映画資料図書館の安井喜雄さんが収集されたフィルムアーカイブではないかと感じています。フランスで「シネマテイク」設立に携わったアンリ・ラングロワを引き合いに出すなら、間違いなく安井さんは日本のラングロワです。そうした収集された個人的な資源が活用されるには、所有権はそれぞれにありながらも、使用权を預けることができる組織、例えばCCセンターがそれを多くの方々の目に触れられる活動を進めていくべきだと考えたわけです。

——最初は自立的なNPOの設立も構想しつつ、スケールメリットを活かして行政と協働することを選んだものの、今回活動を通じて新たにNPOを設立することになったのは、理念に対して活動が退行したとお考えですか？

大阪CC事情 ①

シネ・ヌーヴォ

(大阪市西区九条1-20-24)

<http://www.cinenouveau.com>

個性的な国内外の作品から、アート、ドキュメンタリー、あるいは日本映画の特集など、ここでしか上映されない作品が列挙するミニシアター「シネ・ヌーヴォ」も、西区九条という下町の中で来年10年目を迎える。いわゆる商業路線ではない作品群を多様に発信されてきたわけだが、こ

の8月19日には、さらに「シネ・ヌーヴォX」なるものが新設されるとのこと。「未知なるもの=X」とは何か？シネ・ヌーヴォ支配人の奥三紀さんに「シネ・ヌーヴォX」新設の経緯と今後の展開を伺ってみた。

手にしたチラシのラインナップには、アート、音楽、思想などを中心に、よりアングラなものを対象とした作品群が並んでいる。が、従来と何よりも違うのは、全てがデジタル作品であるということ、つまり「シネ・ヌーヴォX」はデジタル素

材専門の上映館というわけだ。近年のデジタル作品の急激な増加により、その受け皿としてのデジタル専門館なるものが、東京では2、3年前より登場しはじめている。大阪でもそろそろ…との空気に、デジタル上映の先駆でもある東京の配給会社「アップリンク」の後押しも手伝って、新設に踏み切られたとのこと。今後さらに輩出されていく優れた作品たちが、東京一極のまま、地方にとりこぼされていくことへの危惧もあった。現状の映画館環境では受ける余地もなく、その打開策と

してヌーヴォが始動されたのは、非常に嬉しいニュースである。

また、これまでのトークショーや合評会、原一男シネマ塾といった観客との対話・作業の部分においても、さらに特化した独自のワークショップが計画されているとのこと。未知なる可能性を秘めた「X」の展開は、決して一方向のものではなく、新たな客層をとりこんでのさらなる試行錯誤が計られるであろう。

（橋本 鏡子／石井聰互初期作品上映会実行委員）



景山さん [シネ・ヌーヴォ代表] 1974年より、自主上映グループ「シネマ・ダール」を主宰。1984年に、月刊・映画専門誌「映画新聞」を創刊。97年1月市民からの出資を得て「シネ・ヌーボ」をオープン。99年10月には、宝塚市の日本初の公設民営映画館「シネ・ピピア」の支配人に就任。2003年の「映画上映ネットワーク会議in大阪」をはじめ大阪のCC事業に精力的に関わる。

景山：いいえ、そうは思っていない。映画文化を活性化するには日常的な動きだけではなく、お祭りも大切です。こうした上映活動に加えて良質な観客を育てることが重要です。文化を育てるには観客、つまり受け手の存在が必須だからです。CCという活動も、まさにそういうことでした。これまで文化庁による支援でも製作支援は多かったのですが、上映支援は弱かったと言っているのではないのでしょうか？確かに、エスジャパンの資料によれば、年間で上映されている上映作品数を東京を100とするなら、大阪は80で、都市によっ

しかし、大学を卒業しても、大阪ではなかなか仕事がないことが問題です。結局、大阪ではなかなか仕事がないので、結果として人材が東京に集まり、大阪で何かをするときにも東京から呼んでこなければならぬということになってしまっています。ですから、人が集まる場所として情報センターも重要です。

また、映画ファンの方々を対象に数多く上映することも必要かもしれませんが、じっくり上映していくことも大切です。加えて、スポンサーのない映画館はミニシアターのなかでも希です。スポンサーの意見を伺うことなく、自由上映できる環境を生み出して、多様な作品を上映していくことが必要でしょう。

結局、文化は人が生み出していくものであって、組織ではありません。加えて、役所というのは極めて文化に対して冷たいという印象があります。財政が厳しいときにまず切られるのは、面倒くさく、手間もかかるのもあって文化になりがちです。そういうなかで現場が果たせる役割は何かを考えるのですが、これがなかなか大変です。はっきり言えば、3年周期で担当者が変わると、両者がつくってきた関係が壊れることが大きな問題ではな

ては5という場合もあるそうです。

全国的に見ればCC活動の第一歩は、この地域間格差をもとに、まずは上映環境を支援しましょうということ。ただ、大阪ではこの間、アジアンビート、大阪アジア映画祭、ヨーロッパ映画祭、CO2など、行政支援の映画祭や若手支援の動きがあります。それらの力の一つにまとめた映画祭ができないかと思つて、昨年から「おおさか映画フェスティバル」という、大阪映画祭を復活させる動きを生み出しました。これもCCセンター大阪の成果です。来年立ち上がるNPOでも、大阪の映画・映像関係の活発な動きをもとに、日常の上映だけでなく、お祭りの部分も、さらにはフィルムアーカイブの設立など、うまく現状が重なっていきけるのではないかと考えています。

——東京と比べれば8割とはいえない全国的に見れば公開本数が多い大阪が、独自の映画文化を創り上げるにはどうしたらいいのでしょうか？

景山：地域の問題を取り上げた作品の上映環境と、育成した人材が地域のなかで活動できる場を整備することではないでしょうか。京阪神では東京に比べても芸術系大学が多数あります。

いでしょか。新しい担当者「昔のことなど関係ない」と言われ、急に現場に出てくる力関係はしんどいと感じています。それでも、映画館と作家がともに考えて、観客に作意を惹き付けていく、そうしたCCの実践に多様な主体とともに挑戦していきたいと思っています。

——應典院は映画館ではなく、一般に「オシアター」と呼ばれる場所ですが、そのような場に何か期待されるものがありますか。

景山：講座や講演などを絡めながら上映を続けている。映画の結論はあくまで一つではなく、作品から感じ取ることが重要です。映画は切り口を変えることで全く違うように見えてきますから、ただ見せるだけの上映会に終えない應典院の取り組みはとても大切です。都市協会で行ってきた「CC講座」も映画の製作者の思いを引き出すものでしたから、今後、都市協会が解散した後はそれらの講座を應典院で開催する、という可能性もあるかもしれませんね。今後の益々の拡がりを期待しています。

——光栄です。ありがとうございました。

(山) 山口 洋典

大阪 CC 事情 ②

PLANET Studio +1

(大阪市北区中崎2丁目3-12パイロットビル2F)

<http://u-go.to/planet1>

今や関西のインディペンデント映画の制作・上映においては外せない拠点である PLANET studio + 1 (以下プラネット) であるが、プラネットの前身の歴史は70年代より古い。当時はまだ日本で上映されていなかった国内外の優れた作品を、自主上映的にかけていたプラネットに、

80年代に通い、現在はその代表である富岡邦彦さんに、プラネットの役割と今後の展望を尋ねた。当初、良質の作品を求めて各所で盛んに行われていた自主上映の動きも、80年代半ばから興るミニシアターがその役割を担うようになった。が、ミニシアターブームによって、だんだんと興業ベース重視の路線へと流れ、作品は商品化されていく傾向に陥った。このままでは観客の目が低下していくとの危惧を強く感じた富岡さんは、休館していたプラネットを東梅田に再開させた。1995年のことである。

ここでは、国内外の多数のフィルムを有するプラネット映画資料図書館を元に、映像史的に重要な作品を網羅できる定期的上映会を行う。映画を観ていなければ映画を理解できない、面白さがわからない、面白いものを創ることはできない、そんな観客を育てるというスタンスは今も変わっていない。

この姿勢に呼応してやってきた若者達の中から、今やメジャーとして活躍著しい熊切和嘉監督や山下敦弘監督などの実力ある創り手たちが生まれ、彼らの自主制作活動から上映に至るまでの指

導・支援も精力的に行っている。国内外の配給、映画祭出品、CO2*開催などを経て、より実践的なワークショップも現在展開中である。今年4月より場所も中崎町に移り、1階にはステキなカフェも併設され、ますます若人達が熱く集い発信する場として、活発な動きをみせてくれそうだ。

*CO2 (シネアスト・オーガニゼーション・大阪エキシビジョン) 大阪市映像文化振興事業。若き映画作家 (シネアスト) への制作・上映支援を通じて、大阪が未来の映画の可能性を切り開く拠点となることを目指して展開するプロジェクト。

(橋本 鏡子 / 石井聰互初期作品上映会実行委員)

應典院と新しい公共文化政策

松本茂章（県立高知女子大学・文化学部教授）

1、文化政策研究の現状

2006年春は、筆者のささやかな人生にとって、大きな節目となった。3月31日付で25年間務めた全国紙を退職し、4月1日付で県立高知女子大学・文化学部の教員として南国・土佐に赴任したからだ。高知城天守閣を見通せる自室には「文化政策学研究室」と書かれたプレートが掲げられ、授業では文化政策論、まちづくり政策論を担当している。本稿では、政策科学を学び、文化政策担当の大学教員に転じた筆者にとって應典院の魅力や今後の課題がどのように映っているのかについて、つづることにする。

策「文化政策学」の構築に向けて』（勁草書房、2001）も出た。わが国初めての文化政策学部が静岡文化芸術大学に設立された際には、同学部の教員らが中心となり、上野征洋編『文化政策を学ぶ人のために』（世界思想社、2002）が出版された。かつては「文化行政」という言葉をよく聞いたものだが、それでは「自治体文化政策」との違いは何なのか。中川幾郎（帝塚山大学）によると、前者については「従来の思考および施策展開」を指し、後者に対しては、自治体政府としての「主体的かつ戦略的な政策思考とこれにもとづく施策展開」であるという（注2）。つまり、戦略性のない前例踏襲の文化行政と、都市戦略としての文化政策との対比が鮮やかに浮かび上がってくる。1998年には国際文化政策学会が設立された。後藤和子（埼玉大学）によれば、第一回大会（ノルウエー・ベルゲン）での報告は、①芸術政策、芸術家政策、芸術界②文化政策と社会政策、「手段としての」文化政策③文化と経済④文化政策の国際比較⑤グローバル化⑥多文化社会、文化的アイデンティティ、という5つに大別された、という（注3）。わが国でも、2006年6月、文化政策研究会／文化政策学会準備会（事務局、静岡文化芸術大学文化政策学部）が発足。筆者も運営委員（15人）の一人に加わった。第一回研究大会は06年12月2～4日、東京大学本郷キャンパスで開催される。近い将来の学会発足に向けて、文化政策研究の重要性を社会に強くアピールしていかなければ、と心に誓っている。

文化政策学という言葉は、まだ一般的ではないかもしれない。後藤和子は「元より政策学は、経済学・法学・政治学などいくつもの学問を統合した領域であり、中でも文化政策学の場合には、これらに加え社会学や文化自体を分析する人文科学の考え方も含めた、きわめて学際性の高い領域である（注1）」と述べている。その研究は緒に就いたばかりである。

しかし、21世紀初頭、文化政策関係の研究書がいくつも社会に届けられた。2001年には中川幾郎『分権時代の自治体文化政策 ハコモノ行政から総合政策評価に向けて』（勁草書房、2001）や後藤和子編著『文化政策学 法・経済・マネジメント』（有斐閣、2001）が出版されて話題を集め、根木昭『日本の文化政

2、官民協働と新しい「公共」

文化政策研究は、中央政府（たとえば文化庁）の分析、自治体行政のありよう、創造都市に注目したアプローチ、文化経済の視点など、実に多彩で、それぞれに優れた先駆者が活躍されている。筆者の場合は、芸術創造拠点における官民パートナーシップの調査研究に取り組んでいる。なかでも、京都市が2000年4月に開設した芸術創造拠点・京都芸術センターにおける官民協働の運営システムや自治体文化政策の形成過程に注目し、その研究成果は拙著『芸術創造拠点と自治体文化政策 京都芸術センターの試み』（水曜社、2006）として出版した。訴えたかったのは、官民パートナーシップを文化施設に導入することの大きな意義である。すなわち、文化施設を舞台にした官民協働の試みは、21世紀の市民社会構築への足がかりになるのではないかと、問いかけた。

なぜなら、今、政府の体系（ガバナンス・システム）が大きく変動しようとしているからである。従来ならば、政府が民間を統治する形（いわゆる「ガバナンス」）に疑問を抱くケースは少なかったものの、近年になって、公共的なサービスは政府が独占するのではなく、民間も担うのだとの考え方が急速に広まってきている。こうした概念を新たに「ガバナンス」と呼ぶ。新川達郎（同志社大学）は「ガバナンス」について「地域経営や地域活性化のための新たな統治形態、秩序形成、地域形成の様式であり、地域を（行政や住民、

民間事業者が)共に協力して治めるという意味をこめて共治、協治とされる(注4)と述べている。一方、真山達志(同志社大学)は「ガバナンス」について「公共空間の協働管理(注5)」「位置づけている。では、公共空間をどのようにとらえていけばいいのだろうか。」

今村都南雄(中央大学)は、「政府体系の再編は公共空間の再編を伴う(注6)」「と指摘したうえで、「ここでいう『公共空間』には、△国家的公共性▽や△行政的公共性▽を担う部門はもとより、公共サービスの担い手としての民間企業部門も、その限りにおいて含められる。その意味では、△市場的公共性▽の概念が該当する分野も部分的に内包することになる。しかしながら、ここでは、そうした公共性の内実をいかに△市民的公共性▽の含意に沿ったものになしうるか、それが大きな問題である(注7)」「と述べている。

公共性をめぐって官と民の役割分担が移行行く時代に入り、芸術と社会のありようも変化を求められる。自治体の文化政策が最も形になって現れてくる文化施設のありようを考える場合、この場所ですれほど素晴らしい芸術文化が表現されるか、というだけにとどまらず、文化施設という公共空間をどれだけ官と民が協働して管理・運営できているのか、どれほどガバナンス的な状況が展開されているのか、という点も、公共政策を進めるうえでは大きな分岐点になるだろう。

筆者が、新しいタイプの芸術創造拠点(アーツセンター)に注目するのは、上記の理由からである。

直径14メートル、高さ7メートルの本堂(2階)が劇場となり、公演とレジデンス劇団の稽古等で、1年のうち相当の日数が使われている。筆者が06年6月末に應典院を訪れた際に見た劇団「隕石少年トースター」の公演では、会場はほぼ満員で、コミカルな演技に笑い声があがった。観客層は18〜25歳で占められ、なるほど確かに若かった。

実は、このような若者が集う文化施設は自治体立でも珍しい。バブル経済の前には全国に文化会館や市民ホールが数多く建設された。しかし、劇場に詳しい清水裕之(名古屋大学)によると、「文化会館は基本的に貸し館運営によってきたため、芸術作品はあらかじめの場所で作られるのが当たり前で、その創造活動は文化会館の活動の範囲外であるという意識が暗黙に支配している。文化会館は創造活動からは切り放たれている(注10)」「のが実情だった。創造拠点にはほど遠かった。そこで清水は、主な都市には高いレベルの創造活動により地域にサービスする舞台芸術創造拠点が整備されても良いのではないかと期待し、次のように述べている。「これらの劇場は、地域における定常的なプロの創造拠点として機能するように、そこを拠点に活動するレジデンシャルな創造集団を持つことが期待される。ただし、それは公的資金の力だけで実現するのではなく、地域の民間企業や市民からの支援、市民のボランティア活動、民間の芸術創造集団との連携によって構築されるのが、これからの時代にはあった方式である。しかし、こうした枠組みを社会システムとしてリー

3、應典院への期待

「應典院の特徴は、とにかく日本でいちばん、若い人たちが集まる寺だということだ。年間3万人弱の人たちがこの寺には集まるが、その大半が20代の若者たちなのだ(注8)」。應典院を取り上げたNHKテレビ番組に登場した上田紀行が指摘するように、確かに應典院を舞台に、若者文化が日々展開されている。

たとえば、若手演劇人を支援する事業「space x drama」がそのひとつ。2年間にわたって若手劇団を支援するプログラムで、対象は、旗揚げから5年以内の新進劇団である。應典院側は、制作や広報の協力、会場使用料の割引、稽古場の提供などを行う。プログラムへの参加を希望してきた劇団のうち、選考された劇団は定期的に開催される制作会議に参加して、劇場を自主的に運営することになる。劇場の清掃なども引き受ける。優秀劇団は、應典院との協働プロデュース公演を実施する。いわば「運営をともにを行い、劇場と劇団の関係のあり方を探っていくパートナー(注9)」である。

2006年度は、06年6月29日から8月30日まで繰り広げられ、「東京ガール」(2004年結成)、「劇団kusks」(2003年旗揚げ)、「France pan」(2004年結成)、「劇団空飛ぶ猫」(2004年結成)の4劇団が選考された。このほか、「隕石少年トースター」(2004年旗揚げ)が2005年の優秀劇団として協働プロデュース公演を行い、「特攻舞台Backstage」が特別招致公演を実施する。

ドするのは国や地方自治体の戦略的な文化政策である(注11)」。

こうした戦略的な自治体文化政策は、金沢芸術村、横浜・BankART(バンカート)など、いくつかの意欲的な都市で事例を見出すことができる。残念ながら應典院の地元である大阪市の文化行政は揺らいでいると筆者には映る。映像やコンテンツポラリータンダンス、現代音楽、現代詩など現代的な芸術にチャレンジしてきた新世界アーツパーク事業は場所の移転がささやかれるなど、大阪市が支援してきた芸術創造拠点や芸術NPOの先行きは不安定、不透明であるからだ。かつて大阪ガスが先駆的な企業メセナ活動として取り組んできた扇町ミュージアムスクエア(OMS)も、今では取り壊されてしまった。自治体であれ、企業であれ、幹部の異動に伴い、その組織の方針は変化していく。そのなかで應典院のチャレンジは民都・大阪ならではのものである。初代主幹で今は住職を務める秋田光彦のリードのもと、一貫した活動を続けてきたことは、きわめて貴重であると評価したい。少し大きくなるかもしれないが、大阪を代表する戦略的な地域文化政策のひとつと言えるのではないだろうか。

4、今後の課題

順調に推移してきた應典院だが、詳しく現状を調査してみると課題がいくつも浮かび上がってきた。

第一に、後継者の育成問題である。應典院の取り組みは、親寺である大蓮寺住職、秋田光彦の強力なキャラクターで進められてきた社会的実験なのだが、秋田のリーダーシップに頼りすぎているように思える。昨年、秋田が大病を患うと、恒例になっていた秋のメイン事業「モモンズフェスタ」が中断してしまったのはそのひとつの証拠といえる。應典院の活動開始から10年近くを経過した今、後継者の育成が急務である。2006年4月1日付をもって、應典院主幹が秋田から山口洋典に交代した意味は、この問題を應典院も自覚しているということだろうか。

第二に、理念と事業の間に隙間があるように映って仕方がない。中川幾郎によると、政策の概念を分解して序列化すれば、上位から「理念(ビジョン)・使命」、「政策(戦略)」、「施策(戦術)計画」、「事務事業(実施遂行)」と4段階に分けられる(注12)。應典院の場合、最上位の「理念」と最下位の具体的な「事務事業(催しもの等)」は比較的世間の目に触れやすいが、その中間にある「政策(戦略)」「や」「施策(戦術)」が見えない、と筆者は思っている。秋田のキャラクターからみて、應典院は相当の理念先行型である。宗教家、社会事業家としての明確な使命感のもと、熱い理念が語られる。筆者自身、秋田に魅了されて應典院に入りするようになった。一方で、「space x drama」に見られるような、数多くの充実した事務事業が展開され、チラシや機関誌を通じて活動の情報が目に飛び込んでくる。しかしながら、文化政策の研究

だからこそ、筆者は、應典院がどのように生まれたのか、その結果としてどんな運営システムを採用するに至ったのかについて、じっくりと研究してみたい。秋田光彦だけでなく、どのような人たちが應典院の試みに絡み、助言をし、反発しあひながら、意思統一していったのかを探っていくことが考えている。その過程こそ、他の地域の人たちや自治体職員、アーツNPOのスタッフらにとっ

て、参考になるシーズ(種子)がたくさんあるだろうと思いつつ、中央政府や地方政府(自治体)だけが公共文化政策を独占している訳ではない。その実例として、應典院に寄せられる役割はきわめて大きい。

【追記】この拙稿を出稿したあとの06年7月27日、大阪市文化振興課が募集していた「芸術系NPO支援・育成事業」コンへの発表が行われ、應典院寺町倶楽部がトップの評価で選ばれた。06年度から09年度までの4年間にわたり事業は行われ、年間700万円を限度額として事業委託される。大阪市は文化政策のパートナーとして應典院寺町倶楽部を評価し、應典院寺町倶楽部は公共政策の一翼を担うようになったと見えてきた。これに伴い、應典院には「その社会への説明責任が求められること」になる。

【注】

- (1)後藤和子編『文化政策学 法・経済・マネジメント』有斐閣、2001年、250ページ。
- (2)中川幾郎「分権時代の自治体文化戦略 ハコモノ行政から総合政策評価に向けて」勁章書房、2001年、iiiページ。
- (3)後藤、前掲書、255ページ。
- (4)新川達郎「地域ガバナンスから見た指定管理者制度へのアプローチ」『ガバナンス』(きょうせい)、2005年4月号、21ページ。
- (5)真山達志「ガバメントからガバナンスへ」『構造改革』は進んでいるのか」学校法人同志社、2004年、22ページ。

者としては、その中間が見えにくいと感じている。どのような「戦略」を立て、どんな「戦術」「計画」を進めているのか……。

第三に、秋田以外のスタッフの顔が見えづらい。どんなスタッフが活躍し、どのような議論を経て企画が立てられ、事業(催し)に結実するのか。スタッフはどのような過程で應典院に関わるようになったのか。どのように人材育成しているのか。ヒューマンウェアこそが文化施設の充実を左右すると思うだけに(注13)、その実態は広く社会に還元されるべきではないだろうか。このほか、財政的な流れはどうなっているのか、など、應典院をめぐる研究テーマはたくさんある。全国でもユニークなこの劇場寺院が新たな社会的ステージに上がり、社会の信頼をよりいっそう得るためには、こうした道程を披瀝し社会への説明責任を果たしていくべきだろう、と筆者は考えている。

5、おわりに

京都芸術センターにしろ、應典院にしろ、注目を集めたアーツセンターは、多くの視察者を招くことになる。しかしながら、うまくいった結果ばかりを見ても、実は参考にならないのではないかと、筆者は危惧する。その都市ならではの事情や特性に応じて、地域それぞれの背景を踏まえた政策形成過程があり、その結晶として文化施設が今、存在している、と考えるからである。

- (6)今村都南雄編著『日本の政府体系 改革の課程と方向』成文堂、2002年、1ページ。
- (7)今村、同書、5、6ページ。
- (8)上田紀行「がんばれ仏教! お寺ルネサンスの時代」日本放送協会、2004年、113ページ。
- (9)應典院作成「space x drama06」パンフレットの参加劇団募集要項から。
- (10)清水裕之「公共ホールの劇場化を考える」森啓編著『文化ホールがまちをつくる』学陽書房、1991年、87ページ。
- (11)清水裕之、菊池誠編著『アーツ・マネジメント』放送大学教育振興会、2006年、312ページ。
- (12)中川、前掲書、81ページ。
- (13)中川は、ハード主導の自治体文化行政を愛い、「ヒューマンウェアなくしてソフトウェアなし、ヒューマンとソフトなくしてハードなし」と断じている。前掲書、61ページ。

【引用文献】

- ・今村都南雄編著『日本の政府体系 改革の課程と方向』成文堂、2002年
- ・上田紀行「がんばれ仏教! お寺ルネサンスの時代」日本放送協会、2004年
- ・後藤和子編著『文化政策学 法・経済・マネジメント』有斐閣、2001年
- ・清水裕之、菊池誠編著『アーツ・マネジメント』放送大学教育振興会、2006年
- ・中川幾郎「分権時代の自治体文化政策 ハコモノ行政から総合政策評価に向けて」勁章書房、2001年
- ・新川達郎「地域ガバナンスから見た指定管理者制度へのアプローチ」『ガバナンス』(きょうせい)、2005年4月号
- ・松本茂章「芸術創造拠点と自治体文化政策 京都芸術センターの試み」水曜社、2006
- ・真山達志「ガバメントからガバナンスへ」『構造改革』は進んでいるのか」学校法人同志社、2004年
- ・森啓編著『文化ホールがまちをつくる』学陽書房、1991年

「ひと」と「場」の交差点……

應典院にしぎ

呼吸するお寺・應典院の、5月〜7月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

5月

- 2日・主幹の得度式が京都の鹿ヶ谷にある法然院にて執り行われる。その後、「ミニミニティーム」京都三条フジオカフェにて法然院の梶田真章貫主がパーソナリティーを務める「京都三条ホンズカフェ」に就職、主幹が生出演。
- 3日・サリュウ48号掲載の住職VS主幹対談。
- 7日・とある施設で不要となった照明機材をいたたきに主幹、城田が運の屋となり大阪・京都を移動。
- 8日・照明機材のメンテナンス nosの園村さんへお礼のたぐひ。
- 9日・「いのちのちご出会う会」世話人の石黒大圓さんと住職、主幹が打合せ。さらなる事業の充実のための策を練る。
- 10日・s x d 第3回制作者会議 小僧インターン日高主権「フツタカフェ」開催、テーマは「フツタの恋愛論」
- 11日・アーツと仕事研究会第9回タラトは職場の人権研究会・河野尊さんと委員会。残り1ヶ月の動きを調整。
- 12日・石井聰互初期映画上映実行委員会。残り1ヶ月の動きを調整。
- 16日・大阪府現代美術センターから3名来山、今年度カレイドス「フ展」についてのエタリング。

- 9日・「いのちのちご出会う会」世話人の石黒大圓さんと住職、主幹が打合せ。さらなる事業の充実のための策を練る。
- 10日・s x d 第3回制作者会議 小僧インターン日高主権「フツタカフェ」開催、テーマは「フツタの恋愛論」
- 11日・アーツと仕事研究会第9回タラトは職場の人権研究会・河野尊さんと委員会。残り1ヶ月の動きを調整。
- 12日・石井聰互初期映画上映実行委員会。残り1ヶ月の動きを調整。
- 16日・大阪府現代美術センターから3名来山、今年度カレイドス「フ展」についてのエタリング。
- 18日・第50回いのちのちご出会う会「生きるとは夢を持って歩き続けること」をテーマに事故で両腕をなくされた園塚明さんをゲストに迎える。
- 19日・びあ株式会社関西支社に住職と主幹が往訪。石井聰互初期作品上映会の広報協力を依頼。
- 20日・住職が長野の神宮寺で講演。1月のNHK教育テレビのE-TV特集に登場した3つのお寺が集結。
- 22日・主幹交代式。サントリー次世代研究所佐藤友美学部長、京都大学大学院 理学研究科高田光雄教授、きょうとNPOセンター 深尾昌峰事務局長からご挨拶をいただいた。
- 23日・浄土宗事務庁より3名が来山。法然上人80年遠忌にあたって「共生地域文化大賞」に取り組むための打合せ。
- 24日・死生塾、話題提供者は大阪市立大学病院・山口悦子医師。
- 26日・立正佼成会来訪。大蓮寺・應典院の視察に住職・主幹が応対。
- 29日・第3回アーツと仕事研究会 アイティール西村卓さんかゲスト。30日・第4回s x d制作者会議。31日・應典院の歓送迎会。

6月

- 1日・s x d 決起集会。2006年参加劇団と應典院スタッフ、フライングが結集した大交流会。
- 3日・会員総会に代わる「会員のついで」に引き続き、應典院CC第4弾「タライ・ラマの般若心経」上映会。グローバル仏教について上田紀行さんの講演、その後の交流会も大盛況。
- 4日・上町台地からまちを考える会の三周年記念行事。「地域資源と市民力を考える」と題したフォーラムに、住職と主幹がそれぞれ代表理事と事務局長の立場で参画。
- 6日・翌日に控えたパドマ幼稚園で毎年恒例のPTA仏教講座の準備。應典院のスタッフも手伝い。

- 7日・小僧インターン日高主権「フツタカフェ」開催、テーマは「共生人間として働くこと」。石井聰互初期映画上映会舞台監督担当中。
- 9日・高野山真言宗教学部「スピーリチュアルケアワーカー養成講習会」の皆さんが来山。「寺院とネットワーク活動」と題して住職と主幹が話題提供。夜にはフエスティバルゲートのコロンムにて開催された「ことばち対話プロジェクト」に主幹が登場。
- 12日・高校演劇祭に向け、高校生対象に技術伝達を目的としたワークショップ実施。13日まで。
- 13日・京都造形芸術大学「「アーティスト特講」にて主幹が「場所のチカラ」と題して講義。
- 15日・第60回いのちのちご出会う会「再びいのち生かされて」と題し、在宅ホスピスあおぞら主幹・南吉一さんをお迎えする。
- 19日・第4回アーツと仕事研究会、ゲストはアトリエインターンの今中博之さん
- 21日・主幹の出身、大阪大学の渥美公秀研究室にて住職が講義。主幹はお手伝い。
- 23日・應典院CC第5弾「シネマロックデイズアンドナイツ」石井聰互・監督生活30年の閃光「初日。監督をまじえたオープニングパーティ会場は多くの石井ファンの熱気に包まれた。
- 24日・「シネマロック」2日目。初期作品を一举に5本上映。
- 25日・「シネマロック」3日目。最新作「鏡心」上映。監督と製作現場に住職の対談。
- 28日・マイルドホープゾーン設立総会。住職が事務局長に就任。
- 29日・s x d 映画少年トリースター公演初日。7月2日まで。

7月

- 2日・大阪ボランティア協会の機関誌「ウォロ」創刊40年記念シンポジウムに主幹が参加

- 3日・9月開催予定CC映画『母たちの村』上映ご協力いたたくキノキネマ岸野さん打合せ。
- 4日・s x d 東京カール公演初日、5日まで。
- 5日・第5回アーツと仕事研究会。ゲストはビッグイシュー 佐野章二さん。
- 7日・浄土宗事務庁にて「共生地域文化大賞」の企画検討会議。住職・主幹が若手の教員・実践家とともに意見交換。
- 12日・小僧インターン日高主権「フツタカフェ」開催、テーマは「ネットの中の『友たち』世界」
- 13日・大阪都市協会芸術系NPO支援育成事業「レゼンテーション」。
- 18日・s x d 劇団KUSUS公演初日、19日まで。
- 19日・第6回アーツと仕事研究会、ゲストは瑞興寺住職・清史彦さん。同時刻に住職は京都市豊観・まちづくりセンターにて「ミニミニティーム」の講演
- 20日・第61回いのちのちご出会う会 野宿から立ち直って」と題し、ホームレスを体験されたよがくさんをゲストに迎える。
- 22日・ハイスクール・プレイ・フエスティバル（HPF）関西大 学第一高校
- 23日・HPF 大阪教育大学附属天王寺高校。主幹は、たんぼぼの家と近畿ろうきんによる「世間遺産」のお手伝い。
- 24日・HPF 福井高校、第7回アーツと仕事研究会、ゲストはフリースクールフォロの花井紀子さん。
- 25日・HPF 関西創価高校
- 26日・HPF 扇町高校
- 27日・HPF 大阪信愛女学院高校、大阪都市協会より公募事業受託団体として選ばれたとの連絡が。
- 28日・HPF 枚方なぎさ高校
- 29日・HPF 清風南海高校
- 30日・HPF 大谷高校
- 31日・石井聰互初期作品上映会の最終実行委員会。決算報告等を行いつつ、中華料理の席で総括。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第62回 9月21日(木)

「今を生き抜いて」

話題提供者：山本 苑加さん

(「はあとふる21」主宰)

第63回 10月19日(木)

「釜が崎からフィリピンを仰ぎ見る」

話題提供者：福森 隆さん

(プロテスタント香南教会員)

※第62回より参加費と開催時間を変更いたします
なお、第3木曜日の開催は今後も変わりません。

◎時間：18:30～20:30

◎参加費：一般1000円、会員・学生700円

應典院寺町倶楽部共催事業

「若者と仕事」

～これからの就業スタイルを考える～

日本の若年者就業システムの課題をとりあげ、私たちはどんな解決策を社会に提起していけるのかを探ります。

○日時 9月23日(木・祝) 16:00～18:00

○場所 大阪NPOプラザ 3階ホール

○内容 講演と対談

講演：「今、若者が求めている支援とは」

本田 由紀(東京大学大学院情報学環助教授)

対談 学校経由の就業の課題から見える

「教育の可能性と限界」

本田 由紀

松浦 善満(関西子ども文化協会代表理事)

山口 洋典(應典院主宰・應典院寺町倶楽部事務局長)

○申込み

特定非営利活動法人関西子ども文化協会

大阪市福島区吉野 4-29-20 大阪NPOプラザ 207

TEL 06-6460-1621 FAX 06-6460-1628

E-mail office@kansaikodomo.com

應典院コミュニティシネマ VOL.6

映画「母たちの村」プレミア上映会+
ダイアログ

セネガル、フランス合作映画「母たちの村」は、アフリカに古くから伝わる女性の割礼を取り上げることを通して人間の尊厳と愛を伝える映画です。

物語は、主人公コレが割礼を受けた当事者として、割礼を受けようとする小さな女の子たちを保護することから始まります。主人公の行動はコミュニティの伝統に逆らう行為なのですが…。

上映後、この映画に通じる日本社会の問題を見つめ、悪しき伝統や慣習を打ち破る力について考えます。そして、これをきっかけに創造的に生きる知恵を伝承するためのヒントを探ります。

○日時 9月19日(火) 18:30～22:00

○場所 應典院本堂ホール

○内容 映画上映とダイアログ(対談)

第1部：映画上映 18:35～20:39(124分)

「母たちの村」

<http://www.alcine-terran.com/main/moolaade.htm>

第2部：対談 20:50～22:00(70分)

Trad(慣習) and Trend(価値)

～流されず問いかけること～

<ゲスト>

伊田 広行さん(立命館大学非常勤講師)

岡 真理さん(京都大学大学院助教授)

○料金 一般1800円

應典院寺町倶楽部会員・学生1500円

NGO割引1000円(名刺、ニューズレター持参)

※なお、本事業は大阪市現代芸術創造事業として開催される「コモンズフェスタ2006」のプレイベントとして実施いたします。

本年、再開! 「コモンズフェスタ」

2年間休会とさせていただいた應典院寺町倶楽部の恒例事業「コモンズフェスタ」を再開いたします。テーマは「場へのまなざし」。これまで11月の中旬に開催してまいりましたが、今年は再開記念で10月1日から31日を「コモンズ月間」と位置づけ、連日何らかの催しを実施いたします。

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の
ニューズレター

サリュ
Vol.49

<次号 50号は…>

2006年10月発行予定

【特集】：演劇と場

～space × drama2006、HPFを振り返って～

1997年の應典院再建と同時に
はじまった演劇の祭典「space ×
drama」。2003年から若手支援
のプロジェクトになり、今年で
4年目の実施となった。また、大阪
府内の高校演劇の祭典、ハイ
スクールプレイフェスティバル
(通称、HPF)の開催も3年を
数える。若手劇団に場を提供する
意義とは?高校生と共に場を創り
出す意味とは?高校、劇団、劇
場、寺、様々な立場から、應典
院の演劇の場としての意味を明
らかにします。

■発行日

2006年8月25日

■発行人

秋田 光彦

■編集人

山口 洋典

■スタッフ

池野 亮光

大塚 郁子

城田 邦生

■発行所

應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

E-mail info@outenin.com

URL <http://www.outenin.com>

編集後記

この1年で映画関係の方々とのおつきあいが増えまし
た。映画監督、配給・製作会社など映画の作り手とな
る人たち、映画館支配人、上映技師など観客に映画を届け
る仕事をする人たち、そして鑑賞側の研究者、ファン…と、
その関り方の多様さと、裾野の広さに触れました。関わり
方は違っても、みなさんに共通するのは映画への熱い想い
を目を輝かせて語られることです。そのように、夢中
に語ってしまうところに映画の魅力があるのかもしれない
。そんなみなさんの熱い対話が繰り返される場のひと
つに應典院コミュニティシネマシリーズが加われればと願
います。(大塚)

7月、8月と続いた真夏の演劇の舞台芸術祭「space ×
drama2006」が、終わろうとしています。今年も多種
多様な若い劇団が、この「應典院」という場を得て、持て
る力の全てを、まさに太陽の如く燃やしています。また、
今号の特集でもあったコミュニティシネマにおいても、こ
こに集う様々な世代の力を再認識した気がしています。場
と人との出会い、そしてこの場を介しての人と人の出会い。
應典院の持つ「場」としての磁力は、ますます強くなって
いきます。(城田)

編集ということばを辞書で引くと「整理して、構成す
ること」とありました。サリュの編集の役目を務め
て2号目の発行ですが、冊子の編集とは「デザイン(意匠・
装飾)」と「レイアウト(割付・配置)」の両側面から、読
み応えのある「コンテンツ(内容)」を整理して、構成する
ことだと実感している次第です。前号からは「内なる外・
外なる内の視点」として「應典院解題」という連載をはじ
めさせていただき、今号では大阪で映画紹介の冊子作成等
を行っている「シネコミ倶楽部」さんに企画構成の協力を
いただきました。先般8月5日に行ったお盆企画でも会員
の皆さんのご協力をいただいたように、今後も多くの方々
と知の協働編集に努めていきたいと考えています。(山口)

他人の過ちは見やすく おのれの過ちは見にくい

他人の過ちは見やすく、
おのれの過ちは見にくい。
他人の罪は風のように
四方に吹き散らすのが、
おのれの罪は、
さいころを隠すように隠したがる。

仏教聖典「ブツダ・最後の教え」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.49

Top Interview

関西温故知新。
顔の見える歴史に学ぶ

1

特集…コミュニティシネマの意味・意義

應典院による映画文化創造という挑戦

4

【寄稿】映画振興と大学教育

5

應典院コミュニティシネマシリーズ第4弾

タライ・ラマの般若心経

6

DVD、買っちゃいました。

7

應典院コミュニティシネマシリーズ第5弾

石井聰互監督初期作品上映会

10

写真と記録

二〇〇六・五・三二

浄土宗大蓮寺塔頭應典院

16

主幹交代報告式

特集…コミュニティシネマの意味・意義

インタビュー

映画と市民社会の出会い

18

應典院解題

應典院と新しい公共文化政策

26

「ひと」と「場」の交差点

應典院につき

30